



ヨトウガ、成虫



ヨトウガ、幼虫(ヨトウムシ)、乾燥標本



ヨトウガの生態標本(昭和初期作製)

ヨトウガ

ヨトウガ。漢字では「夜盗蛾」と書く。幼虫は「夜盗虫(ヨトウムシ)」である。日中土中に潜むが、夜になると地上に這い出て、農作物を食い荒らすので、この名がついた。開帳四五ミリの灰黒褐色の翅に白い紋をもつ鱗翅目ヤガ科の昆虫。幼虫は終齢で体長五センチほど。キヤベツなどの害虫として有名である。

明治から昭和初期にかけて、農作物の収穫をあげることに同時に害虫駆除は重要な農学教育使命であった。現在、北大で昆虫学を専攻する研究室は、農学部、理学部など多岐にわたるが、最も古くから研究が行われているのが、農学部昆虫体系学講座(旧昆虫学教室)である。札幌農学校時代からの農業害虫駆除への基礎応用両面の学問として昆虫学が必要であったからである。

二〇〇八年までに農学部から総合博物館へ移動となった昆虫標本は約三五〇万点。そのほとんどが分類学用であり、目一科一属一種といった分類体系にそって、個別の種に分けられ収蔵されている。この標本群にはタイプ標本が多く含まれ、アジアの昆虫の学名(種名)の安定の礎となってきた。

分類標本に混じり、わずかではあるが、標本室の一角に教育目的に作製され

た標本がある。『蛾類生態標本』とラベルされた箱には、成虫、蛹、幼虫、卵、天敵の標本が、種別に並べられている。大害虫ヨトウムシ *Manethra brassicae* のラベル(旧名の *Parathra* 属で表記)の下には、成虫三個体、幼虫五個体、蛹個体が並ぶ。幼虫標本は、内蔵を抜いた後に尾部からストロー(藁)を刺し、空気を吹き込みながら火の上で乾かした乾燥標本である。現在はアルコールなどに浸ける液浸標本が主流で、手間のかかる乾燥標本はほとんど作製されていない。さらにヨトウガ幼虫に寄生するヤドリバエの七個体とその囲蛹殻も並ぶ。ヤドリバエには二種が含まれ、大きいハエがブランコヤドリバエ *Exorista japonica* 雄、小さいのが *Athrycia curviventris* (和名なし)。いずれも鱗翅目幼虫に広く寄生する農業上重要な天敵である。

整然と並べられた分類標本と違い、教育標本には標本の並べ方、作り方に製作者の注意と配慮がみられる。卵や蛹など、すべての発生段階を集めるには長い時間をかけた採集と飼育が必要であったに違いない。「これから農業に携わる若者が、害虫の姿形を頭に叩き込めるように」、そのための教育配慮をもつて作製された標本である。

(総合博物館 おおはらまさひろ)